

ノンアルコール

乳化
汚れ
銀ベタ
技術の進歩

オーイ！皆んな元気でやってるか。モォー、ホント飽きるくらい、湿し水の話ばかりしてるね。でもね、オレがこうしてガンバってるのは、それなりの理由があるのだよ。というのはね、以前、日本印刷技術協会にノンアルコールに関する講義を依頼したら、ケラれてしまった経験があるんだ。

成田さんも知らないうちに随分出世してしまって、今では「愛知県印刷技能士会 副会長」なんていう立派な肩書があるんだぜ。エッヘン！愛知県下では副会長で、自分の会社の社内ではヒラ社員。このアンバランスなところが成田さんらしくてイイだろう…と余談はさておき、ノンアルコールに関する講義をできる人って、なかなかいないんだよね。イヤイヤ全くいないワケじゃない。現に先日の、ある講義ではノンアルコールについての講義を、やっていただいた。ところがだ！その講義の内容ときたら何がなんだかサッパリ分からん！難し過ぎるんだ。自分で言うのもなんだけど、オレは一生懸命勉強してるつもりだ。そのオレが半分も理解できない！だから、あの講習会に参加してた諸君！理解できなかったからってガッカリするな。分からなくて当然だ。もし完璧に理解できたとしたら君は天才だ。だってさ、講義にきた先生は学者みたいな人で、自分達の研究会やデータを収集する機関があって、そこで議論されたことや集められたデータをそのままオレ達に発表してるっていうやり方なんだぜ。毎日、実際に印刷してるオレ達にとっては、全く見当の合っていない講義だったな。

●本当の講習会

いつか、このコーナーで書いたことがあるけど「簡単なことを難しく解説することは、誰にでもできる。しかし、本当に大切なことは、とても難解な理論を誰にでも分かるように説明すること」だ。オレはこの本当に大切なことに挑戦したい。偉い学者の講義ももちろん必要だろう。けれど、机上の理屈やデータを並べられたところで、オレ達の明日からの仕事に即プラスになるようなことは、あまり多くはない。オレがこのコーナーで「乳化」についての解説をしたことがあった。マヨネーズとドレッシングを例に挙げて。そして乳化防止のためには「とにかく水を絞れ」と言った。そしたら、それを読んでくれた人から文句がきてしまった。「水を絞らにゃいかんことくらい分かつてる。でも、絞ったら汚れるやないか。汚れんように絞る方法を説明せんかい！」…ごもっとも。それが一番大切なことだよな。オレは、講師とそれを聞きにきた皆んなとの間で、こんなステキな会話ができる講習会の講師をやりたい。「そのためには、こうするべきです」「エエッ！そんなことをしたら大変なことになりますよ」なんて、皆んなでワァーワァー言ったりして…。

そんなステキな講習会が実現できたら良いネ。向こうが学者の研究部会なら、こっちはバリバリ現役のオペレータ集団だ。偉い先生を連れてくるより、うんと有意義な講習会になると思うんだけどな。知っておくと役に立つ理論が山ほどあって、それを具体的に実践する簡単な方法がある。それを一つ一つ理解できれば「印刷」って、とっても楽しい仕事だとオレは思うよ。

●職人？

例えば「銀ベタ」をうまく刷る方法があるでしょう。オレはその方法（というより技術）をヤングの皆んなに教えてあげたいと考え、こうして文章に書く。しかし、オレなんかより、もっとスゴイ技術をもった人がいて、事実、オレより美しい銀ベタを仕上げる。オレはその技術が知りたくて、その人に教えを請う。ところが、その人が言う。「オレとオレの会社はなあ、この銀ベタの技術でメシを食ってるんだ。簡単に教えられるか！」って…。

確かにその通りだと思う。人一倍苦勞して、たくさんの失敗を繰り返して、作り出した技術を簡単に教えられるワケがないわな。しかし、しかしだ！「そんな時代なのか?!」とオレは言いたい。銀ベタをどうしてもうまく刷ることができない若いオペレータがいて、銀ベタを刷るたびに叱られる。叱られても叱られても理屈と方法を知らないんだから、うまく刷れるワケがない。そして、そのうち印刷という仕事がイヤになってしまって、他の職業にトラバユしてしまう…決して少なくない事実だと思うよ。

多くの可能性をもったヤングが、そんなことで辞めてしまう。オレはこうしたことが一番悔しい。「技術を身に付けたかったら、見て盗め」なんて職人時代みたいな古風なことを言ってる時代じゃないよ。銀ベタを美しく刷り上げることができたときの喜びと自分自身に対する感動、そして印刷の奥の深さを教えてあげられたら、何人もの若いオペレータが育つと思うんだけどな。オレは技術でメシを食う職人じゃなくて、より良いものを求めて理想や技術を知りたい。だから皆んなが、ああだこうだと言ひ合える講

習会をやってみたいと考える。A社では常識のようなやり方もB社では驚異的なことであり、C社では冗談じゃないと言う。じゃあ、本当に正しい考え方は何なんだ…と議論する。そんな中から得られることって結構大きいんじゃないかな？そして、それこそ印刷という技術の進歩につながるのだと考える。

ウーン、今回はカチカチの固い話になってしまったな。でも、これでもオレの言いたいことの半分も言えてないような気がする。ただ、オレが必死になってノンアルコールの解説をしているのも、こんな考え方がオレの中にあるのだということを理解してもらえたら、嬉しいな。

アッ、今回のタイトルは「ノンアルコール」だったね。ハハハのハ。ノンアルコールの話、一つもしてないや。ゴメンね。先日の講習会があまりにも難しかったから、ついついこんな話になってしまった。次回はしっかりやるよ。ノンアルコール用のエッチ液も良いものがあるからおもしろいよ。いよいよ選択には困っちゃうけどね。ではまた！

(1992年1月号掲載)